公開講演

沢庵の禅の世界

船岡　誠

ただいま過分なご紹介を頂きまして、恐縮しております。船岡でございます。私は一一年前に北海道へ行きまして、それまでは今お話にありましたように、石川力山先生とか、あのここにも何人かいらっしゃいますけれども、一緒に研究会やりまして、月にそうですね一回、場合によっては二回ぐらい駒澤大学におじゃまして勉強しておりました。向こうに行きまして、何かのんびりしましてね、駒澤大学で互いに切磋琢磨して研究されているのを、遠く北海道の地から羨ましいなと思っておりました。で、今日は、石井修道先生の方からお話がありまして、何か話せということで、本来ならば道元の話をすればいいのかなと思うんですが、とても恐れ多くて、すぐれた研究者が沢山いますからこちらに。それで沢庵の話をさせていただくことに致しました。

私は禅を歴史学の立場から考えております。特に、歴史と人間、歴史における個人の役割、そのような問題にですね、関心を持って勉強してきました。歴史における個人の役割、たとえば、国家に対峙する個人という点からいきますと、これからお話しする沢庵という人物は、大変興味深い人物であります。

沢庵は、中世の終わりから近世の初めにかけて生きた人物でありまして、特に国家権力とぶつかった、江戸幕府とぶつかったということもございます。そういう点で、国家と個人というテーマの非常にいい素材です。それからもう一つは、仏教も中世から近世に移る時にずいぶん変わったんではないかと、中世的な仏教と近世的な仏教、その変わり目の所に位置している、そういう意味でも沢庵は、興味深い存在だろうという風に思っております。

そこで沢庵はどういう生涯を送ったんだろうかということから始めたいと思います。年譜をご覧頂きたいんですが、この年譜、非常に略した年譜でございますが、これによると沢庵は、天正元年に生まれて、正保二年に亡くなっております。正保二年といいますと、宮本武蔵が亡くなった年なんですね。

皆さん誤解されている方がいらっしゃるかもしれませんので申し添えておきますが、宮本武蔵と沢庵はいわれるような関係にはないですね。武蔵とは関係ないですけれども、柳生宗矩とは非常に深い関係をもっています。その剣の達人に剣の道、禅の道を説く禅僧というイメージは正に沢庵そのものであります。じゃあ何故そういうことが可能なんだろうか、ということも含めてこれからお話をしていきたいと思います。年譜をちょっとご覧頂きたいんですが、天正元年に生まれている。故郷は但馬の国の出石という所であります。ここは戦国大名の山名氏の居城のあった所でありますが、父親の秋庭綱典というのは、山名氏の家臣であります。従来、漠然と沢庵というのは長男であるという風に言われてたんですね、で私も長男だろうという前提で出発をしてました。でも何故なのかなという風に思いまして、どうもそういう伝承があったようですけれども、それと『万松祖録』にそう書いてある。幕末のころに工藤行広という人が書いたもので、『万松祖録』の基になったのが『東海和尚紀年録』というものです。これは武野宗朝という、子供の時に沢庵の下で修行した俗弟子が書いた沢庵の伝記です。宗朝のお祖父さんが紹鷗という茶道史の方で有名な人物でありますけれども、その武野宗朝が、沢庵が亡くなってから三年後に書いた。それが『紀年録』という作品、これを基にして、幕末のころ工藤行広が、その『万松祖録』というのを書くんですが、その『万松祖録』の中で長男って言っているですね。そんなことで、『沢庵和尚全集』の編纂をやりました辻善之助という大先生がおりますけど、その先生も、沢庵が長男であると書いているんですね。で私も、なんとなくそう思ってしまったんです。それで長男なのに、何故出家したんだろうと、問題にされてきたんですが、よーく見ますと、沢庵はどうも次男ですね。沢庵の書簡の中に俗兄秋庭半兵衛というのが出てきます。それも何か所か出てきます。だからそれを尊重する限りまず間違いない、半兵衛は兄なんですね。そうすると沢庵が出家するっていうのおかしくない。まあ最近そのことに気付いたということがあります。

話を元に戻しますと、但馬の出石に誕生しまして、最初浄土宗のお寺に入るんですが、どうも沢庵は浄土宗に合わなかったようでして。で、一四歳の時に、これは当時東福寺系のお寺だったと思いますが、宗鏡寺という所に入ります。浄土宗に合わなかったというのは、『紀年録』によりますと「心要」心の要って書きましてね、それを浄土教では得られないんじゃないか、という風に沢庵考えたと伝記には書いてあります。そのあたりはちょっと分かりませんが、もし伝記作者の創作でなければ、やはり沢庵さんにとって浄土教が合わなかったのかなあ、という感じはしますけれども。その出発点

の所でそういう問題が多少あります。そして、その宗鏡寺にですね、大徳寺のお坊さんで董甫宗仲というのが招かれて来ます。それ以前希先秀先という人に師事していたのですが、その希先さんが亡くなっちゃう、そのあと董甫宗仲が大徳寺から招かれてやって来まして、この董甫さんに師事します。で、その董甫が大徳寺に帰るときに、沢庵は一緒に付いて行きます。出石から京都に出ます。で、大徳寺の塔頭の三玄院に入ります。この三玄院の住職が春屋といいます。春の屋根の「屋」ですね。春屋、春屋宗園といいますけれども。この人は非常に大徳寺では大物であります。その春屋宗園の弟子が董甫さんなんですね。ですから沢庵は、ちょっと複雑なんです。沢庵は董甫さんの実質的な弟子だったようですが、一方で春屋の門下ということになります。その春屋が石田三成に招かれまして、近江佐和山に瑞岳寺というお寺を造りまして、春屋さんが開堂供養を行って、その後、寺を董甫に任せる。沢庵も瑞岳寺に残ります。ところが、関ヶ原の戦いで、石田三成が亡くなります。そのさいこの瑞岳寺も燃えてしまったようです。そして沢庵は京都に戻ります、京都に戻って、間もなくですね、董甫さんが亡くなっちゃう。そうしますと、沢庵は、京都を離れまして、大徳寺離れまして堺に行ってしまうんですね。ここも一つの重要なポイントだと思うんです。春屋さんていうのはあの実質的な師ではないかもしれませんけど、形式的な師といいますか、沢庵にとって大先生なんですね。しかし董甫が亡くなったとたんに大徳寺を離れちゃう。まだ大先生が居ますから離れる必要ない。それでも離れた。これは結果的にはですね、沢庵は春屋と肌が合わなかったんじゃないかと思います。ここに、沢庵の一つの生き方が現われているんじゃないかなと、いう風に思います。その後、堺で文西という人についたり、この人も亡くなると一凍紹滴に師事します。この一凍紹滴は大徳寺三玄院の春屋宗園の弟弟子に当たる人なんですね。ですから端的にいいますと沢庵は兄弟子の方を嫌って、弟弟子の方に走った、ということになります。この春屋宗園は社会的に活躍している人、パトロンも沢山います。それに対して一凍は、堺で静かに、しかしながら厳しい禅を維持している。そういうタイプだったんですね。沢庵は一凍に師事しますが、その翌年にはもう印可を受けています。印可を受けるというのは、お前はこれで一人前だ、禅僧として出来上がったという証明、ですね。これを貰ってますから、沢庵は一凍に参ずるまでには、ほとんど禅僧として出来上がっていたというふうに言えるのではないかと思います。

　そして、後はトントン拍子で、三五歳の時に徳禅寺の住職になります。これは大徳寺の住職になる前の段階でありまして、徳禅寺の住職になると、今度次のステップ、大徳寺の住

職になるという資格が生ずるわけであります。そして三七歳、二年後ですね、三七歳の時に大徳寺の一五三世として奉勅入寺をいたします。でこれも昔は気付かなかったことなんですが、この奉勅入寺の時に沢庵は祝聖香、つまり天皇に対してお香を焚くんですが、そのあと将軍香、勅使香、檀邦香、そして嗣香、師匠に対して焚くわけです。注目すべきは、沢庵が将軍香を焚いていることなんですね。将軍香を焚いてまして、征夷大将軍に対して「将軍のために武威を祈る」それから「国家の権威長く源氏に帰す」という言葉を沢庵は吐いているんです。このあとお話しますけれども、沢庵は紫衣事件で幕府と真っ向からぶつかるんですね。その時の発言などから考えてみますと、どうも沢庵さん幕府を認めていなかったんじゃないか、という風に思っていたわけです。ところがここではっきりと言ってんですね。しかもこれ、あの大坂の陣の前、二年前ですか、まだ大坂の陣が起きてない段階です。だから豊臣秀頼もまだ顕在である。沢庵自身は大徳寺に身を置いたお坊さんですから、どちらかといういと、幕府に対しては親しみを持ってなくって、寧ろ朝廷側という風に思ってまして、幕府のことを認めてなかったんではないかというように漠然と思ってましたけれども、どうもそうではなくって、この段階で将軍香を焚いていることを改めて確認しておきたいと思います。その後四一歳の時に大燈国師の年譜を書いております。ただこの年に紫衣法度が出されている。この紫衣法度というのは、後の紫衣事件の原因になるわけですけれども、大徳寺とか妙心寺ですとか、知恩院なんかもそうですが、そこに対して出された法度です。そこの住職になるためにどういう手続きが必要かといいますと、お寺から、推薦人が住職候補者を推薦致しまして、天皇がそれを許可し勅使が派遣され、それを迎えて晋山式を行うわけです。ですから幕府は一切関係なかったんですね、従来は。で、それに対して幕府がこう介入致します。つまり、天皇の許可を貰う前に幕府に知らせろと、告知を義務づけます、ここで。ところがなかなか守られていなかったようですが、すぐには問題化しません、まだこの段階では。

四三歳元和元年、つまり大坂夏の陣であの豊臣氏が滅びます。これで幕府は反幕府的な勢力を一掃したわけです。その結果、幕府は大変強気な政策を打ち出していきます。その内の一つに、そこに書いておきました大徳寺諸法度あるいは妙心寺諸法度というのがあります。これは個別に大徳寺とか妙心寺に対して出されたものです。で、この中で非常に厳しい言い方をしてきます。例えば住職になる、大徳寺の住職になるための条件を提示します。細かいことが沢山ありますけれども、重要な所は、三〇年間、出家してから三〇年間経たないとダメだよと言うんですね。それからもう一つは、一七〇

〇の公案、それを透過しなくちゃダメだと、こういう条件を付けてきます。これは、その前に出されました紫衣法度とは全然質が違うですね。つまり幕府が宗教の内容にまで立ち入ってきているという意味がある。でもまだすぐには問題化しません。

沢庵は、その後、故郷出石の宗鏡寺の荒廃していたのを再建する。それから大坂夏の陣で堺の町は灰燼に帰してしまいますから、南宗寺も燃えてしまったんですが、これ南宗寺というのは堺のある意味で大徳寺の出先機関みたいなものですけれども、非常に重要なお寺ですが、それを再建したりしております。これも非常に面白いんですけれども、沢庵さんはですね、新しいお寺を造る、造って開山になろうという気はどうもあまり無かったんですね。それよりむしろ荒廃しているお寺を中興する、再建する、そちらの方が功徳は十倍もあるぞ、というようなことを言っています。沢庵の故郷出石の殿様になる小出吉英が自分の父親の菩提を弔うために大徳寺に沢庵の塔頭を造りたいと。で、そうなれば沢庵のためにも非常にいいだろうと思って言うんですけど、沢庵はこれを断ってます。その申し出断ってその時、大徳寺の聚光院を再建した方が功徳は一〇倍あるぞ、というようなことを沢庵言ってます。そこで私ちょっと不勉強で、一〇倍の根拠はいったいどこにあるのか分かりませんけどね、ご存じの方があったら教えて頂きたいんですが。沢庵は再建ついては一所懸命やりますけど、新寺建立には消極的ですね。これは沢庵の生き方に関わってくるのかなという感じがしますが。そしてこれもちょっと以外だと思われるんですが、四八歳の時に、沢庵自身が言っていることですが鬱病になったと言ってるんですね。鬱病になって和泉の山中で保養を加えたっていう。私は昔このことが非常に気になりましてね、つまり禅僧で、もう悟りを開いているわけですから、それが自ら鬱病になったなんていうのはどういうことだろうという風にね。で、しかもそういうことを平然と言う、ということで、ちょっと気にしたことがあります。実際に沢庵さんはそう言ってるんですね。和歌の添削を頼んだ時に言っているもんですから、今考える躁鬱病の、欝、とまた違うかなってな感じはしますけど。

そしてここで少し触れておきたいのは、四一歳の時ですね、慶長一八年に、さきほど触れませんでしたが、総見院後住出入一件、これも従来ほとんど関心が持たれなかった事件なんです。これは結構私重要ではないかなと思ってまして、それともう一つが四五歳の時の墨蹟偽造事件というのがあるんです。これ最初の方から申しますと、総見院というのは、大徳寺の塔頭であります。織田信長が死んだ時にこの総見院で葬儀を行った豊臣秀吉が後継の位置を印象付けた所ですけれども。その総見院の住職であったのが玉甫という人なんですけ

れども、この玉甫さんが亡くなりまして、この玉甫という人物はあの細川幽斎の弟でありまして、沢庵が大徳寺に出世する時に、推薦人になってるんですね。だから沢庵と非常に縁がある人物ですが、この玉甫さんが亡くなった時に後任の住職をめぐって争いが起きるんです。後任の住職の候補者は二人おりまして、月岑というお坊さんと、賢谷というお坊さん、この二人がいます。でどっちが正当であるかっていうこれが大問題になりましてね、大徳寺の中で大事件になっちゃうんですね。で幕府まで巻き込んで紛糾します。で何が問題なのかといいますとね、月岑という人は、玉甫とは兄弟弟子になるんです。それで、もう一人の賢谷という人物は、玉甫の弟子なんです。賢谷はもともと五山の系統から入って来た人で、大徳寺での修行というのがまだ五年とか七年とかそんなに経ってないんです。月岑はそこを突きます。その際、五山は詩文にうつつをぬかし禅の修行が疎かになっているとの意識がありありと見えるんですね。幕府を巻き込んだと言いましたけど、幕府の方であの有名な南光坊天海が、月岑の方の後押しする。それから金地院崇伝は五山の頭目的存在で、幕府の宗教政策を一手に引き受けたみたいな男ですけれども、この金地院崇伝がその賢谷の方の後押しをしている。かなり紛糾するんですが、最終的には落着します。しかしその時大分しこりが残った。総見院の後任住職には賢谷ということになるんですが、実質的には住職になれない。何故かと言いますと、賢谷はまだ大徳寺に出世してませんから総見院の住職になる資格が無いんですね。そこで賢谷を大徳寺に出世させようと働きかけがあるんですけど、大徳寺ではそれをしぶるんですね。このままいったら大徳寺はおかしくなるぞというようなことが言われております。この一件は紫衣事件の前夜の事件ではないかなという風に考えています。

　それから、もう一つは墨蹟偽造事件、これも面白いんですが、松岳紹長というお坊さんがおりまして、これは沢庵の先輩に当たる人ですけれど、この人がなかなか器用で書の偽物作りが得意で、偽物を作ってしまった。どういう偽物かと言いますと、大徳寺を開いた宗峰妙超、大燈国師の墨蹟に似せて、偽物をつくったんですね。それを織田信長の弟織田有楽斎が五〇両で購入したんですね。有楽は大燈国師の墨蹟だと言って、喜んで見せびらかしたんでしょうね。そうしましたら、どうも偽物ではないかという話が出てきまして、織田有楽は冗談じゃない、これ五〇両で買ったんだというんですね。それで、真贋の判定を京都所司代に持っていったと言うんですね。で、京都所司代では判定がつかなくって幕府の方にいった。幕府の方では五山の長老達が見ましてね、これは本物だっていうことになって、金地院崇伝もこれはすばらしいとこう言ったんですね。ところが、大徳寺の沢庵達があれは偽

物だって言い張って。で、結局偽物ってことが分かるわけです。そんときに金地院崇伝は赤っ恥をかいたわけですね。崇伝は、後で言い訳してます、「俺は本物だと言っていない」と。あのマッチポンプじゃありませんけど、火を付けたのが大徳寺の坊さんで、それを消したのも大徳寺の坊さん、間に入った五山の長老達、それと金地院崇伝、これは、あの真贋が見抜けなくて赤っ恥をかいたんですね。こういうことがあった。これはどうも紫衣事件への伏線になっているんじゃないか。この後紫衣事件が起こります。

先ほど申しました、紫衣法度が出て、それから大徳寺諸法度が出て、住職になるためにはこれを守んなければいけないということになる。ところが一向に守られていない。そこで徳川秀忠が、かんかんになって怒るわけです。この時秀忠は将軍職を家光に譲っていて大御所ですが、政治の実権はまだ握っている。その秀忠が京都所司代を通じまして、今後大徳寺・妙心寺では出世を厳禁するということになります。これは両寺にとって大問題になります。これは両寺にとって死活問題ですから。ところがですね、その出世の禁止を言い渡された翌年に、沢庵は京都やって来まして、玉室のお弟子さんで正隠という人物の推薦人になって、出世させてしまった。これは法度には背いていますし、前年秀忠の厳命を完璧に無視しています。当然これ問題になります。幕府で問題にしていることが分かると、大徳寺や妙心寺ではどうしようどうしようと、右往左往します。とこういう時に沢庵がやっぱり期待されちゃうんですね。それで沢庵が筆を取りまして、大徳寺諸法度に遂一反論する抗弁書を幕府に提出します。これがなかなか勇ましいものでありまして、大徳寺諸法度、先ほど言いましたように五箇条なんですけど、その中の一箇条が一番重要で、三〇年の修行、一七〇〇の公案透過という条文があるわけですが、それに対して真っ向から批判するわけです。沢庵こう言います。仮に一五歳で出家したとすると、それから三〇年かかんないと一人前になれないわけですね、一人前になったら、四五歳。そこで終われればいいんです。ただ禅僧は、弟子の育成を義務づけられておりますから、またそれから三〇年かかって弟子を育成しなくちゃいけないわけですね。となると単純にいっても七五歳になるわけです。そんなのは、人間の命は限りがあるんだから無理だと言うわけです。で、これは、あの重要なのは、沢庵が自分が悟りを開いて一人前になったらそれでいいって言うだけのことじゃなくって、それからちゃんと弟子を育てる、一人前にするのが義務である、いう風に思っていることなんですね。で、そのことを一応ちょっと確認しておきたいんですが。そしてもう一つの、一七〇〇。これは『景徳伝灯録』に載っている禅僧の数であって、大体一七〇〇なんて公案なんかないんだと、だか

らこの文言をしたためた人はよっぽど禅のことに暗いんじゃないか、というようなことを言うんですね。ところが、その法度の背後には先ほど申しました金地院崇伝がいる。金地院崇伝は、それまで大徳寺から色々と煮え湯を飲まされている。この際、大徳寺を叩こうかというふうに思ったに違いない。そのことを沢庵は良く知っている。だから真っ向から反対する。非常に皮肉ですよね。この文言したためたのは禅のことに暗いんじゃないかってこう言っている、暗いどころじゃないですよ、禅宗界の親玉ですから。五山の一番トップですからね。そういう問題があって結局、沢庵達は、流罪になるわけです。沢庵は出羽の上山という所に流されます。もう一人玉室は奥州の棚倉、今の福島県ですけれども、そこに流されます。これが紫衣事件。妙心寺からも二人流されますけれども。これを期に、後水尾天皇が譲位をします。紫衣事件は政治史の上でも大変重要な事件だったわけであります。ただしこれは、先ほど申しましたけれども、大御所秀忠ないしはその側近達の行ったことでありまして、家光は、将軍の家光はほとんど関知していなかったみたいです。柳生宗矩たちもこの時期に一所懸命沢庵達の為に奔走しておりますけれども、結局流罪ということになってしまったんですが。

その後はさらっと流していきます。秀忠が亡くなりまして、その大赦で家光が沢庵達を呼び戻す。ただ不思議なのはそれから二年間大徳寺への帰山が許されないんですね。これも私前の時には分からなかった。何故二年間も家光は沢庵達を江戸に置いていたんだろうか、良く分かんなかったんですね。全くの無罪放免にしたわけじゃなかったんです。で、これも最近、ああそうかなと思ったのは、結局この大徳寺の帰山を許された時に、その直後に家光は三〇万の大軍を率いて京都に行くんですね。そのことと関係があるんじゃないか、京都の朝廷なんかに対しての手土産代わりではなかったかな、という風に最近ちょっと思いはじめております。そうするとこの二年間拘束していた、拘束しながら沢庵と会ってないんですが、その理由が分かるような感じがいたします。大徳寺帰山を許されて、沢庵は大徳寺に戻りまして、大徳寺のお坊さん達に挨拶をして堺の南宗寺に直ぐ行ちゃいます。そうしますと、柳生宗矩とか天海の使いが京都からやって来まして、家光に無罪放免になったお礼を言った方がいいとさんざん言われます。しかし沢庵は、将軍なんかに会う立場にはないといって断るんですが、やはり断りきれなくて家光と会う。その後家光にいたく気に入られてしまった。家光は、沢庵のことは柳生宗矩から大分聞かされていたと思います。それで非常に関心持たれて、家光は沢庵のこと離そうとしないんです。沢庵としたら故郷でも帰って、静かに余生を送りたいという風に思っているんですが、何としても家光が沢庵を自分の所

に置いておきたい。で、江戸に呼ぶんですね。そして江戸に呼んだらもう離さない。ということで、最終的に沢庵は、品川に東海寺を造ることを同意させられます。家光巧みなところがありまして、沢庵がいやがると、あの問題もまだ解決しなくては、と言うんですね。あの問題というのは出世問題です。紫衣事件以来出世が禁止されています。その問題を解決しなければという風に家光から言われる。ま、人質を取られているみたいなものですから。沢庵にとってはぜひとも解決しなくてはいけない問題です。自分が引き起こしたことですから。その甲斐あって六九歳の時に、出世問題が解決したわけです。沢庵はここで自分は思い残すことはない、いつ死んでもいいというようなことを言っております。只ここで、一つ問題があります。晩年ですね、例えば家光は沢庵に嗣法の弟子がいない、法を受け継ぐ弟子、法嗣といいますけれど、そのお弟子さんがいない、それを非常に心配しまして、沢庵から見て満足のいく弟子でなくっても嗣法させた方がいいのではと、このまま沢庵の禅が消えてしまうのは淋しい、というようなことを言われる。しかし沢庵は、それを固辞します。それから家光だけじゃなくって後水尾上皇も、沢庵には弟子がいないんじゃないかと、弟子を作りなさいということを盛んに言います。これも固辞します。家光や後水尾だけじゃありません。かつて、沢庵の行動に対して非常に感激しまして、わざわざ京都から出羽の上山まで行って、半年程沢庵の下で修行した人物、一絲文守というお坊さんですが、沢庵に法嗣がいないことを批判しております。一絲は幕府が大っ嫌いで、天皇、皇室よりなんですね、だから幕府に真っ向からぶつかった沢庵の行動に非常に感激して、沢庵の下に半年程いた。その人物がこの時期、沢庵のこと批判してます。あなたは弟子のえり好みしてるんではないかと。本当に立派な師というのは、弟子のえり好みをせず、その中から立派な禅僧に育て上げるのが、立派な師なんだと。一絲の場合は、沢庵が弟子の育成をきちんとしていないという批判なのです。それに沢庵がどう答えたか史料が残っていないので分かりませんが、ここに嗣法の問題、法を受け継ぐ弟子をつくらなかった、あるいはつくれなかったという問題があります。そのことを含め幾つかの問題をお配りした資料を見ながら考えていきたいと思います。

さて、まず沢庵の遺言ともいうべき「老僧遺誡之條條」から始めたいと思いますが、全文は一六箇条あるんですけれど、ちょっとうっかりしまして、二箇条切れているのを忘れまして、そのまま印刷お願いしちゃったわけです。ちなみに申し上げておきますと、一五条と一六条というのは、一五条が、自分が死んだ後、石塔を建てるなという条文です。それから、一六条が、年忌をするなという条文がありまして、全文で一

六箇条からなっております。これは『沢庵和尚全集』から取ったんですが、一六箇条ご覧頂きますと、沢庵のこだわりが良くわかります。まず第一条で、私には嗣法の弟子がいないんだと。だから私が死んだ後、万一、自分の弟子だと、沢庵の弟子だという者がいたら、これは法を盗む賊であると、で官に訴えて大罪にすべきであるということを言っております。こちらに一休の研究をされている飯塚大展さんがいらっしゃいますが、飯塚さんともちょっとさきほど話していたんですけど、これ一休の『自戒集』の中で同じこと言っているんです。ですからひょっとしたら、沢庵は一休のことを意識していたかなという感じはありますね。ほんと同じこと言っています。第二条は嗣法の弟子がいないのだから、あの、葬儀の時に主となって客を迎えることが出来ないということ、ですからお経なんかあげに来る人たちがいたら絶対お寺の中に入れるなと、辞退しろということを第二条で言ってます。それから第三条で、自分は以前に衣鉢を先師の塔に返したから、今は単なる黒衣の一懶衲である、怠惰な坊主にすぎないと、沢庵は出世していますから紫の衣を着ることが出来るわけですが、自分はあくまで黒衣であるということにこだわります。これも実はよく一休に似ています。一休も同じこといってます。それから四条目ですね、私が死んだ後、紫衣の画像を掛けてはいけない、一円相をもってその真に代えて欲しいということを言っています。円相というのは、沢庵のものは有名ですけれども、丸がありまして、そこにちょんと点を加えたもの、これ二つ創りましてね、品川の東海寺とそれから堺の南宗寺、これ一つづつ置いてます。それでもってその真に代えろと頂相に代えろと言っている。これもちょっと意味があるかなと思います。朝日新聞から「仏教を歩く」っていうシリーズが出てますね。その中に沢庵と武士道という一冊があります。頼まれまして、私沢庵についてちょっとかいたんですけども、その時、円相についても説明してくれって注文がありまして、ぎりぎりになって。で、どしたもんだろうかなって考えたんですが、一応それなりにちょっと短い文章ですけどね、書いた。その時に私苦し紛れにこう書いたんです。円相とは一体なんだろう、これ一種の真理を具象化した、形に表したもんだろうという風に思いまして。紫衣の画像の代わりにこの円相でもってそれに代えて欲しいという風に言った、ということ。それも、こんな風に思ったわけですね。これからお話しますけど、沢庵さんはどうも最終的に自分自身の存在を抹殺しようとしたんじゃないか。そうしますと抹殺した後、何が残るかっていうことですね。残るのは真理だけだろう、そういう風に思いまして、そう書いたんです。ちょっと格好良すぎるかなと思いましたけれども、そんな風に書いた。

で、後の方はですね、五条、六条、七条というのはこれは葬儀の時の供物だとか、焼香だとか、香典だとかは辞退せよ、ということを言ってます。それから八番目では、わたしが死んだあと禅師号を受けてはいけないというもの。そして後の九条、一〇条は、本寺と関わりがないという意味ですね。そういう、入牌をしないとか、長老が亡くなった時にする一山の施斎をやるな、というようなことを言っておりまして、自分はもう大徳寺とは関係ないんだ、自分は本寺を退いて身を荒蕩に捨てた身であって、本寺の経営なんか一切関知していないと。だから施斎を行ってはいけないと。これはかねてからの所存であって、昨日今日思いついたことではないよ、というようなことを言ってるんですね。次の一一条、一二条の所で、頂相に賛を付けるとか、求めに応じて道号などを与えてきたが、それは決して印可を意味するものではない、ということを言っております。これも実は一休さんもまったく同じこと言っている。ですから、どうも沢庵さん一休さんを意識してたのかな、と思えるのです。そして一三条では、自分の葬法についてのこだわりをみせています。自分が死んだ後、火葬にしないで夜中に密かに担いで、人の知らない所に行って、深く穴を掘って、そこに埋めて欲しいと。芝草でもって覆って決して塚形にしてはいけないよと、こういうことまで言っている。また一四条で、もし昼間亡くなった場合には、夜まで待って、分からないようにして運んで葬って欲しいと、そんなようなこと言っているんですね。そして一五条で石塔を建てるなって言っております。要するにお墓を造るなということなんですが、それは残念ながら守られませんでした。今品川東海寺行きますとちゃんと沢庵のお墓がありますし、故郷出石にもちゃんとお墓があります。そんなことで、沢庵の意志は守られなかったわけです。それからここには書いてありませんが、沢庵はどうも自分の伝記を作るなということを、かなり厳しく言っていたみたいです。ですから沢庵さんのお弟子さん達は伝記を作ろうとしなかった。しかし先ほど申しました武野宗朝、彼は俗弟子ですが、そういう遺言があったことは自分も知ってるが、私は出家の弟子ではないから沢庵さんの遺言を守る必要はない、このまま誰も伝記を書かなければ沢庵さんが歴史のなかに消えてしまう、これほど悲しむべきことがあろうか、と彼は『紀年録』を書くわけです。それはともかく沢庵さん自身は自分の伝記を書いてはいけないと言っている。先ほどの塚形にするな、石塔を建てるな、つまりお墓をつくるなということ。ここにも自分の痕跡を留めないようにしよう、という意識がどうも働いているわけです。そういう自分を抹殺する、自分の痕跡を消そうとするというのはどういうことなんだろうと考えております。

年譜の次ぎの史料に天秀尼に宛てた手紙があります。この

天秀尼というのはどういう人物かというと、豊臣秀頼の娘であります。鎌倉の東慶寺の住職だった女性、尼さんです。その天秀尼に宛てた沢庵の手紙なんです、これはちょっと読んでみますと最初の四行は、後から読みますが「かさねて御文くたされ候、しかれは古則の事、うけ給候、わたくし事、廿年もはや禅の仏法を人にしめし申候事も、御さ候ハす候」私は二十年、もう二〇年間禅の仏法を人に示していないって言うんですね。で「そのゆへハ、仏の正法五百年今ハ末法にて候へハ、いにしへの法をしめし候へは、そは道へはしり候て、よきすしへゆきかたく候、さ候へハ、あしき道に道引まいらせ候ににたる御事にて候ゆへ、其とをりにて候、こゝもとに久しくゐ申候へとも、一人もさんなときゝ申事御さなく候、かしく」とこうなってます。ここで重要だなと思ってるのは、傍線の部分ですが、自分が二〇年間もはや仏法を人に示していないと言っていること、そのことと、古の法を人に示しても間違った道に導くだけだと述べていることです。そして上の方いきまして、「かまくらにてさんせさせられ候よし、きとくなる御事かんし申事にて候、古そくはハかきりもなき御事にて候、五そく七そくさんせさせられ候へハ、御心のすちハ、すみ申へく候、こゝもとにて我々参をもしめし申候て、その上ハかさねて申候へく候、まつまつ此度は御のへなされ候へく候」とこう言ってます。ここから分かることは、天秀尼が、沢庵に、大徳寺系の公案を教えて欲しいという風に手紙を出したようですね。それに対して沢庵は、公案は五つか七つか、それぐらいやればいいんだ、そんな沢山、あれもこれも沢山集めて、やる必要はないよ、とちょっとたしなめている所がありますね。先達て亡くなった、玉村竹二先生がこの史料を使いまして、「沢庵宗彭―紫衣事件に関する一見解」という論文を昔書かれております。で、その中でこの天秀尼宛の書簡を使いまして、ここで沢庵が言っているのは、「密参」の否定で、それはとりもなおさず中世禅宗の否定を意味する、ということをおっしゃっているわけです。私もそれはそうかなと思うわけですけれども、ここでより強調した いなと思っているのは、古の法を示しても意味がないということにかなり重みがあるんではないか。それと二〇年前から自分はもう仏法、禅の仏法を人に示していない、ということ。これはいつの手紙なのかよく分からないですね。まあ大体書簡は、年号書いてありませんから、内容から判断して、何年ぐらいのものだろうという風に考えるわけですけどね。これはちょっとよく分からない。こんな話があります。沢庵の故郷であります出石、出石の殿様になります小出吉英という人物が、ちょうど東海寺の建立直後だと思いますけど、あるお寺の鐘の銘文を書いたものを沢庵の所に送ってきたんですね。そこで内容がどうなのかと言ってるんですね。で沢庵は

それを読みまして、これは松ヶ岡の寺の鐘だって言うんです。松ヶ岡の寺というのは東慶寺の事です。東慶寺の鐘がどこかにいってたようですね。で沢庵は、これは東慶寺の鐘だと、こういうものは本来あるべき所にいかなくちゃいけない、本所にと書いてありますけど、本所に戻すべきであると言っています。ですから小出吉英は、沢庵のことを考えて、こういう鐘があるんだけどお寺にどうだろう、そのつもりでこの銘文を送ってきたんでしょうね。その時沢庵はこう言ってます、これは松ヶ岡の寺の鐘だと、でこれは秀頼のご息女が住職をしているお寺である、と。これ言ったのは、寛永一六年ですから、元々、天秀尼とは色んな意味での繋がりがあったということが分かると思うんですね。

次に二番目の所に「人法を求めるに答う」というのがあります。ここで「師の印を得て自り後、今已に四〇年」ということを言ってます。師の印可を得てから四〇年といいますと沢庵最晩年、亡くなる前の年、七二歳の時です。沢庵さんは弟子の育成をしてこなかったのかというとどうもそうではないっていうんですね、「一則の話頭を以て人に示す」と言ってますから。この一則の話頭がどういう話頭なのかどういう公案なのか、ちょっと興味があるんですが、分からない。只其れで正しい知見を得た者は今までいなかったと言うんですね。だから、これから五〇年命が長らえたとしても、今までを考えれば恐らくこの先も推して知るべきだ、そうすると、弟子を育成出来なかった、弟子を作れなかったということは、済度が出来なかったということだと、済度の出来ない禅僧は、生活のために禅僧やってるみたいなもので、これほど恥ずかしいことがあろうかというんですね。だから自分は仏法を捨てて唱えないと言います。ただ形だけ坊さんの形をしているけども、それは師の恩を捨てない為なんだと、いうことを言ってます。ここで沢庵は、自分は弟子を作れなかった、作れなかったっていうことは禅僧としてはダメなんですね、ダメだと。それは充分自覚しているわけです、彼は。だから自分はもう禅僧を止める、仏法を捨てる、と言っております。それからその次の三番目の史料も同じようなものなんです、これ寛永一八年のものですが。もう死後のことは毛頭思わない、末世の法は三〇年前に見限ったっていうんですね、相続の事、寺の事は思わない、従って遺像遺言も心にない。と言いながら先ほど紹介しましたように「遺誡之條條」を書いてますけどね。こういうこと言っている。ですから沢庵は、もう三〇年前に仏法を見限ったと、寛永一八年から三〇年前と言いますと、慶長一六年、沢庵三九歳ということになりますね。三九歳と言いますと、大徳寺に出世した二年後ですよ。もうその段階で仏法を見限ったって言ってる。じゃ沢庵さんはその後一体、何のために生きてきたんだろう、という疑問が湧い

てきます。先ほど言いましたように、紫衣事件では彼は大徳寺を代表して幕府に抵抗して流罪までなってます。その行動はいったい何だったんだろうという疑問が出て来ます。

で、その次の史料ですけど、ここで、あの細川光尚宛ての書簡というの出しておきました。沢庵さん色んなこと言っておりますけど、こういう俗人に対して沢庵さんが得道、悟りと言ってもいいでしょうか、それは一体なんだっていう説明してる非常に分かりやすいと思いまして、これを出しておきました。細川光尚は細川幽斎の曽孫です。幽斎の子供が忠興、その子供が忠利で、忠利の子供が光尚です。ですから沢庵は、幽斎から数えますと四代に渡って細川家と関係がある。特にこの光尚と忠利とは非常に近しい関係にありました。沢庵は彼らに公案なんかを課して禅の指導もしたようです。それで沢庵は光尚にこんなことを言ってるわけですね、「古則話頭をみたとて、得道者成にても候らはす候。それは言句之段々を明からめたるにて候」。つまり古則公案ですね、そういうものを見たって得道したことにはならんよと、言葉の上でのことであって得道とは違うよと。「得道は別にて、意はなき物なとゝ申すは、あさき事にて候。よく本心を明められ候て、世間之何事に付ても、心を付候て見候へは、天地間之事、一身にたがふ事も一つもなく候」。世間の何事に付いても心を付けなさいっていうんですね。心を付けなさい。そうすれば天地の間のことは一身に違うことは一つも無いんだと。その次の所ですね、「天地万物を一身心におさめ候はねば、得道之人にては無之候」、天地万物それを自分のこの体身心、それにおさめてしまう、それぐらいの気概、それがなければダメなんだ、という。「かれはかれ、我は我、草は草、木は木にて候らはす候。日月雲霧(も)むしけら鳥けた物、みな一物にて候。さとれは一つ、まよへは各々にて候。よく外之形をとりのけて御覧候はゝ。万物と一つにましはりてある心にて候。かたちにへたてられて、我人の差別もある事に候。天地同根万物一体と可有御覧候」。ここで「天地同根万物一体」ですが、これは、沢庵さんの色んな所に出てきます。それで、これは沢庵の基本的な立場というか考え方だったのかなあという風に思います。ちょっと脇道に逸れますけど、沢庵さんと家光が最初に会った時、たぶんこれ京都の二条城じゃないかと思うんですが、あるいは江戸で一度くらい会ってるかもしれませんけれども、その時にこんなことを言ったっていうんですね。家光が、長らく流罪で苦労かけたなあって言った時に沢庵はこう言ったんです。この「天地万物同根一体」、だからどこにいても同じです、と言ったんですね。そしたら家光という人は非常に面白い人で、扇子かなんか持ってたんですね、それでもって畳をぽーんと叩きまして、どうだ痛いかってこう言ったんです。「天地万物同根一体」ですから畳

とも沢庵とも一体なってる筈だと。だから畳を叩いてどうだ痛いか、こう言った時に沢庵さんは即答するんですね、「尚髪爪を切るが如し」。人間の髪の毛だとか爪これ肉体の一部ですけれど切っても痛くない、そんなもんだよと。こういった話があります。これなんかちょっと出来すぎたような話で、ほんとかいなっていう感じはいたしますけれども。ここでも「天地万物同根一体」と言ってます。色んな所で沢庵さん言ってます。でこれはどうも沢庵の基本的な立場である。その他の所で、例えば『結縄集』というのがありますけれども、その中に恐らく唯一沢庵さんの茶道論を語った部分だと思いますが、それを読みますと、天地中和の気ということ言ってます。天地中和の気、それをもてあそぶのが茶道だと。天地中和の気って何かって言いますと、天地が中和するとそこから万物が生まれてくる。ですから天地中和の気は万物の根源を意味する。沢庵別の所で言ってますけれども、それは所謂仏性というものだ、と言っております。ですから、茶道の究極の目的と禅の目的とはまったく同じだということになってしまう。茶禅一味といわれるゆえんです。

それでその次の五番目の史料でありますが、時間がちょっと無くなってきたような感じが致しますけれども、「碧巌九十偈」の中から「禅」と「僧」の部分だけを引いておきました。で特に「禅」の所では、禅というものは何かっていうと、授けるとか受けるとかっていう問題ではないんだということを言っております。弟子が悟りをひらき師がそれを証明してあげるだけだと。だからその間に法を授けるとか法を受けるとかそういう問題ではないんだ、ということ言っている。それからその次の「僧」の所ですけれども、そこで、まあ自己を究明する、明らめる、己事究明と申しますけれど、己事究明、そして印可を受けて、それから聖胎長養、悟った後の修行をやる、それで人を救ってゆくという。二行目の「自己を利する之余り、以て他を利す」というところ、これでいいのかっていう問題がありますが。そして下の方の傍線の部分では、沢庵さんは相当批判的な言葉を出しております。一紙の印状を得て、まだその墨が乾かぬ内に、自分はもう仏法が解ったっと言って、で、勅状だとか壇命も無い段階で自ら奏して綸旨を受ける。そして住職になっていくようなのが最近の連中であると。これは名ばかりの比丘であって、渡世の為にやってるにすぎない、というようなことを言っております。ここに沢庵の同時代の仏教界に対する批判的な言葉があります。先ほど法は授けるとか受けるとかというものではないということと同じなんですが、六番目の『東海夜話』の中の一説です。法は嗣ぐべきではない、嗣ぐべきは法ではないんだと、法は断ずるものでもない、断じてしまうのは法ではないと、こういうこと言います。法というのは、無始無終なんだ

と、無始無終、始めもないし終わりもないと、だから断絶なんかも無い。ただ仏が出てくれば法は顕れると。まあこういう言い方をしています。こう述べることが沢庵さんの嗣法の弟子を作らなかったということの弁明になるかどうか分かりませんが、多少関係するかなという感じは致します。

そして七番目でこんなことをいっております。「仏法能収りたるは、世法に同す。世法能収りたるは、仏法に同す。道は只日用のみ。日用の外に道なし、仏に法なし、衆生は迷ふに依て、此迷をはらさん為に、強て仮の是非有無を立て言説に渉る、人是を法と云ふ。衆生迷わざるときんは是非有無邪正なし」。人は迷わなければ是非有無邪正なんてのは無いんだと、こういうことを言っておりまして、だから仏法というのは日用だけなんだ、この普通の我々の生活ですね、それだけなんだと、こういうことを言っている。この種の発言は他にも結構ありまして、例えば『万松語録』巻一だけでもこれだけあります。「吾祖之禅道他事無し。只是無事而已」、「仏法祖道遠からず。唯日用而已。日用の外に道を求むるは。邪魔の為す所なり」。それから「夫れ仏法は遠からず。唯目前日用而已。」。それから最後の所で世諦と仏法と一般であると、只日用のみだ、この他に法を求むるは外道である、とこうこと言ってます。ここに沢庵さんの基本的な立場があるんじゃないか。それであえて私は沢庵の禅は日用禅である、という風に言いたいわけです。日用ですから別に小難しい議論も必要ない。しかし、そうは言ってもわれわれの日用とはどこか違うんですね。というのも、細川光尚のお父さんの忠利が沢庵のことをこういっております。ちょっと読んでみます。

「沢庵和尚御無事に候、別而上様御懇、日に増申候」沢庵は元気で、家光の懇意も日増しに強くなっているとし、「御心安なれ申候程、感入事計に成申候」つまり、心安くつき合えばつき合うほど感じ入ることばかりだと、で最後の傍線部分、一応全部読んでみますと、「不思議成儀候、或時、人、子をころし、なげき候」、ある人が子供を死なせてしまい非常に嘆いていた。「此事に付、面白事を承り候、かへらぬ事をなけくなと申人御入候処に」、それ嘆いてもしょうがないよ、と言ってた人がいた。そこに沢庵が「何程も歎候へ、悦は悦、かなしみはかなしむ事、仏法之さい上にて候、か様に候得者、平人に替たる事無之様に候、平人と悦うれいおなしうして、海山替り候所御入候と聞へ申候」つまり普通の人と全然変わらないことを言っているんだけども海と山位違う、という風に忠利は沢庵のことを考えていた。仏法といっても特別なものではないんだ、と言うことを沢庵さんは随分強調しているように思います。日用禅であるが故に、ある意味では色んなことに通じていくんじゃないか。例えば柳生宗矩、剣の達人ですけども、その柳生宗矩に沢庵は禅の道を説く。剣の道も

説いています、お手前の兵法で言えば、なんてことを言いますから。ですから根本にあるなにか精神みたいなものを沢庵さん掴んでおった。だから何にでもそれを適応できる、ということではないか。お茶の世界もそうです。沢庵さんは禅の専門用語でまくし立てると言うんではなくって、相手の立場、相手の土俵でもって、充分相撲が出来ると言いますか、そういうことの出来た人なんだろう、という風に思います。ただしそのことと、沢庵さんが大分前に仏法を見限って、仏法をすてて唱えないこととは別な問題でしょう。客観的には沢庵さん最後まで禅僧ですね。一応説法もしてます。ただ弟子は作らなかった、あるいは出来なかった、あえて作らなかったのか。その辺りがすっきりしなくてもう一つ掴み切れていない、というのが現在の私の沢庵に対する見方であります。

大体一〇分くらい時間を残しなさいということでしたので、このあたりで話を終わりにしたいと思います。正直言いまして、沢庵さんの本当のところを掴みきったのかっていうと何かもう一つ分からない所があります。自分が理解できた沢庵さんが、本当の沢庵さんなのか、一抹の不安が現在でも残っております。こんな形で今後とも沢庵さんを考えていきたいと思っておりますけれども。今日は中途半端な沢庵像、沢庵を中途半端にしか捉えていないという私の話をお聴きいただきまして、どうもありがとうございました。